

桃のある風景

岡本かの子

青空文庫

食欲でもないし、情欲でもない。肉体的とも精神的とも分野をつき止めにくいあこがれが、低気圧の渦うずのように、自分の喉頭のどのうしろの辺あたりに鬱うっして来て、しつきりなしに自分に渴かわきを覚えさせた。私は娘で、東京端はすれの親の家の茶室ちやしつ作りの中二階に住んでいた頃である。私は赤い帯を、こま結びにしたまま寝たり起きたりして、この不満どこが何処どこから来たものか、どうしたら癒いやされるかと、うつらうつら持て扱あつかっていた。

人が、もしこれを性の欲望に関する変態のものだつたらうと言あるいうなら、或あるいはそうかも知れないと答えよう。丁度ちやうど、年頃としごろもその説あてはを当嵌あてはめるに妥当だとうである。しかし、私はそう答えながら、も

のごとを片付けるなら一番あとにして下さいと頼む。それほど私には、片付けられるまでの途中の肌質のこまかい悩ましさが懐かしく大事なのだから。

母は単純に病気だということに決めてしまつて、私の変つた症状に興味を持つて介抱した。「お欠餅を焼いて、熱い香煎のお湯へ入れてあげるから、それを食べてご覧よ。きつと、そこへしこつてる気持がほごれるよ。」「沈丁花の花の干したのをお風呂へ入れてあげるから入りなさい。そりやいい匂いで気が散じるから。」母は話さなかつたが、恐らく母が娘時代に罹つた気鬱症には、これ等が利いたのであろう。

色、聞、香、味、触の五感覚の中で、母は意識しないが、特に

嗅覚を中心に味覚と触覚に彼女の氣鬱症は喘あえきを持ったらしいこと
 とが、私に勧すすめる食しょくじ餌じの種類で判わかつた。私もそれを好まぬこと
 はなかつた。しかし、一度にもつと渾こんぜん然ぜんとして而しかも純粹じゆんじゆんで爽さわか
 な充足を欲した。「もつと、とつぷりと浸ひかるような飲のみものはな
 い？」「しとしとと、こう手で触ふれるような音おんぎよく曲きょくが聴きき度たい
 なあ。」母は遂とうとう々々、匙さじを投げた。

「男持ちの蝙蝠傘こうもりがさを出して下さい。」「草履ぞうりを出して下さい。」
 「河を渡つて桃を見に行くから。」私は必ずしも、男性に餓うえて
 いるというわけではなかつた。渡しを渡つた向むこうぎし岸ぎしの茶店ちやみせの
 傍そばにはこの頃毎日のように街の中心から私を尋たずねて来る途中、画が
 架かを立てて少しばらく時じ、河岸かしの写生しやうしやうをしている画学生がくせいがいる。この美

少年は不良を銜^{てら}っているが根が都会っ子のお人好^{ひとよ}しだった。

私は彼を後に夫にするほどだから、かなり好いてはいた。けれども、自分のその当時の欲求に照^{てら}して、彼は一部分の対象でしかないのが、彼に対して憐^{あわ}れに気の毒であつた。

茶店の床^{しょうぎ}几^{ねず}で鼠色羽二重の襦^{じゆばん}袢^{えり}の襟^{えり}をした粗^{あら}い久留米^{くるめがすり}緋^ひの美少年の姿が、ちらりと動く。今日は彼は茶店の卓で酒を呑^のんでいるのだ。私は手を振って、尾^ついて来ちやいけないと合図すると、彼は笑つて素直に再び酒を呑み出した。私は堤^{つみ}を伝^{つた}つて川上の方へ歩いて行つた。

長い堤には人がいなくて、川^{かわ}普^ぶ請^{しん}の蛇^{じゃ}籠^{かご}を作る石だの竹だのが散らばっていた。私は寒いとも思わないのに岸^{つな}に繋^{つな}いである

筏いかだの傍には焚火たきびが煙けむりを立てていた。すべてのものは濡ぬれ色いろをしていた。白い煙さえも液体に見えて立たち騰のぼっていた。

川上の上は一面に銀ぎん灰かい色しよくの靄もやで閉しじられて、その中から幅の広い水の流れがやや濁にごつて馳はせ下くだっていた。堤づの崩くずれに板いたの段おぎなを補おぎなつて、そこから桃畑とうりんに下くだりられるようになっていた。私は、

ここで見渡せる堤づと丘きゆう陵りやうの間の平地一面と、丘陵すその裾すそ三分の一ほどまで植わえ互たしてある桃とうりん林りんが今を盛もりに咲そき揃そろつている強烈な色彩にちよつと反感を持ちながら立ち止とまった。だが、見つめていると、紅あかい一面の雲のような花の層に柔もかい萌も黄えきいろの桃とうりんの木の葉はが人ひと懐なつかしく浸にじ潤じゆんみ出でているのに氣きを取り倣なされて、蝙蝠傘こうもりがさをすぼめて桃林へ入いつて行いつた。

思い切つて桃花の中へ入つてしまえば、何もかも忘れた。一つの媚こびめいた青白くも亦またとき色の神秘が、着物も皮膚も透とおして味覚こころよに快い冷たさを与えた。その味覚あじわを味う舌が身体中からだのどこあに在るやら判わからなかつたけれど味えた。「伝十郎」とまるで人間の名のように呼ばれるこれ等らの桃の名を憶い出して可笑おかしくなつた。私は、あはあは声を立てて笑つた。

冷たいものがしきりなしに顔あたに当る。私は関かまわずに、すぼめて逆さに立てた蝙蝠傘を支えにして、しやがんで休む。傘の柄えの両手の上に顎あごを安定させ、私は何かを静かに聴きく。本能が、私をそうさせて何かを聴かせているらしい。桃林の在るところは、大だいた体川砂の両岸あふに溢れた軽い地層である。雨で程ほどよく湿度を帯び

た砂に私の草履ぞうりは裸足はだしを乗せてしなやかに沈んで行く。「すと」
「すと」花にたまつた雨の滲しずくの砂したたに滴たる音を聴いていると夢まぼ
ろしのように大きな美しい五感交こうゆう融ゆうの世界がクツシヨンのよう
に浮うかんで来て身しん辺ぺんをとり囲む。私の心はそこに沈み込んでしば
らくうとうととする。

こういう一種の恍惚感こうこつかんに浸ひたつて私はまた、茶店ちやみせの美少年の
前を手を振つて通り、家の中二階へ戻る。私は自分が人かわと變かわつて
いるのにときどきは死に度たくなつた。しかし、こういう身みの中なかの
持ちものを、せめて文章でも仕末しまつしないうちは死に切れないと
思った。机の前で、よよと楽しく泣き濡ぬれた。

後年、伊太利イタリアア フローレンスで「花のサンタマリア寺」を見た。

あらゆる色彩の大理石を蒐あつめて建てたこの寺院は、陽あたに当ると鉞物でありながら花の肌になる。寺でありながら花である。死にして生、そこに芳烈ほうれつな匂においさえも感ぜられる。私は、心理の共感性作用を基調にするこの歴史上の芸術の証明により、自分の特異性に普遍性を見出みいだして、ほぼ生きるに堪たえると心を決した。

——人は悩なやましくとも芸術によつて救われよう——と。

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第十四卷」冬樹社

1977（昭和52）年5月15日初版第1刷発行

初出：「文藝」

1937（昭和12）年4月号

※表題は底本では、「桃《もも》のある風景」となっています。

※「しつきりなし」「ほぐれる」「喘《あえ》き」「しきりなし」

「漣《しずく》」「仕末《しまつ》」の表記について、底本は、

原文を尊重したとしています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年3月30日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桃のある風景

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>